

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No. 8

平成4年7月1日発行

編集：総務委員 矢倉 睦

事務局 移転のお知らせ

いつもいろんな面で御世話になっている島川法律事務所ですが、山岳会ニュースこの号の発行をもって、事務局の仕事を終え、これからはダイヤモンド電機㈱へ事務局が移転いたします。事務局があった間には、本当に些細な、面倒なことがらを一手に引き受けていただいております。島川先生と、実務をしていただいていた二人の女性、森田さん、上兼さん、御世話になりありがとうございました。そして、これからはダイヤモンド電機㈱の松本嬢が庶務をやってくださいます。新しい事務局もこれまでと同様親しくご利用くださいませ。

新事務局： 〒532 大阪市淀川区西中島5-13-12 谷ビル
ダイヤモンド電機株式会社内
大阪市立大学山岳会事務局

事務局退任にあたって

島川 勝

ダイヤモンド電機の橋本さんがアメリカ出張になるので事務局を引き受けるように大橋会長から言われたのが、昭和62年の始め頃でした。

それまでは山岳会の一般会員として山岳会行事に軽く参加していたのですが、事務局をやってみて行事の一つ一つが大変なものなのだと気づきました。

大変だったのは何といっても四光峰の事務局も兼ねたことです。後援会の組織づくり、資金集め、パンフレットの作成など、大橋会長の陣頭指揮のもとに山岳会会員の協力とバックアップで成功させましたが、事務局にどうしても仕事がまわってきました。

嬉しかったのは、遠征隊がラサに入る頃に暴動が起こり、これで計画もダメかと思いましたが、わずかの時間差で無事入れたことです。また佐藤氏から、登山隊の様子を刻々と正確にかつ情感あふれるレポートが送り届けられ、隊員の家族の皆様や関係者にお届けできたことです。

一身上の都合で事務局を再びダイヤモンド電機にお返しいたしますが、これまでの御協力を感謝し、山岳会の益々の発展を期待しております。

市大山岳部の事務局のお手伝いを昭和62年よりさせていただき、庶務、会計等色々の方々に助けられ、この度無事終了することができました。事務局の主な仕事は、会員・会友の方々への会報の発送、総会・園遊会のお知らせ…など、通信・連絡に関する事がほとんどでしたので、やはり四光峰登頂に関する事が一番、私の印象に残っています。

今から思えば、何が忙しかったのかわからないのですが、当時事務員が一人しかいなかったこともあり、本来の仕事（法律事務）が3割、山岳会関係の事務が7割という状態で、事務所がひっきりかえっておりました。事務所全体が四光峰優先ムードでしたので、遠征隊が登頂に成功されたと聞いた時は、本当にうれしくホッとしました。

そして、私はこの四光峰の件をもって、事務局のお手伝いをうちの強力なニューフェイスに譲り、勇退いたしました。というわけで最近あまり事務局のお手伝いをしておりませんので、ここに載せていただくなんて、本当におこがましいような恥ずかしいような気分です。

とにかく、色々至らない点多かったことと思いますが、皆様には本当にお世話になりました。そして、次の事務局のダイヤモンド電機㈱の松本さん、頑張ってください。長い間ありがとうございました。（島川事務所 森田有子）

夏のよく晴れた朝、部屋の窓から乗鞍の頂が見える—という環境に育ちながら、北アルプスば乗鞍と燕しか登ったことがありませんでした。（「もったいない！」という声が聞こえてきそうですが…）。

それが島川事務所で市大山岳会の事務局を手伝うことになるなんて、やはり何かしらご縁があったのでしょうか。但し昭和の千秋楽からでしたので、四光峰の

準備段階の一番忙しい事務については、森田さん一人で大変だったろうと思います。ですから私だけおいしい所取りをしたようなもので、お恥ずかしい次第です。

四光峰初登頂の知らせを受けて事務所で祝杯をあげた日のことは、今でも良く覚えています。山岳会の大先輩方の喜びの笑顔が、少年たちのように若やいで映り、体育会の縦のつながりがちょっぴりうらやましく思えたのでした。

また山岳会ニュース発行の際は、誰よりも先に原稿を読ませていただきました。なかなかの名文揃いで、おそらく私も熱心な「ニュース」ファンの一人だったのかも知れません。

三年半という短い間でしたが、最後までお気づかいいただきましてありがとうございました。今後のご活躍をお祈り申し上げます。最後になりましたが、矢倉さん、これからもがんばってください。

(島川事務所 上兼恵理)

泉隆次郎氏追悼集 原稿募集進む

山岳会ニュース7号で募集しました故泉隆次郎氏追悼集の原稿ですが、続々と集まってきている状況です。原稿をお寄せ頂いた方、ありがとうございました。泉さんの一周忌である12月に発行すべく、編集委員ではいろいろ資料集めに奔走しております。ですが、やはり皆さんの原稿が主体です。まだ筆を取られていない方、どうぞ一筆お願いいたします。最終締切は7月末といたします。新事務局までよろしくお願いします。

北海道大雪山登山と秘湯めぐり ㊦

北海道支部(?) 上田 忠士

日時：1992年6月17日～21日

メンバー：三島夫妻、藤本夫妻、岡本夫妻、藤村夫妻、島川、宮川夫妻（藤村の友人）、上田夫妻（現地）

本州は梅雨で、北海道はカラッとしたこの時期に、三島大先輩を始め大阪の有志が北海道に夫人同伴でやって来た。現地に住んで6年の上田が穴場案内をした。

6月17日

先発組、三島、藤本、岡本各夫妻は大阪空港8:40出発。千歳よりJRで旭川へ。旭川市内でおいしいお寿司の昼食と優佳良織り見物後、大雪の秘湯天人峽温泉、天人閣へ。露天風呂を楽しむ。

6月18日

後発組、藤村夫妻、宮川夫妻、島川は、大阪を朝出発、現地の上田夫妻と千歳空港で合流。2台の車で岩見沢の陶芸「こぶ志焼き」、旭川の「大雪黒」と優佳良織り見物後、旭川温泉、勇駒荘へ。

先発組は羽衣の滝、敷島の滝見物後バスで勇駒荘へ。ここで全員13名集合、大宴会となる。山の歌など合唱。7部屋に分かれ就寝。

6月19日 ガス、一時晴れ

朝一番のロープウェーで1600mの姿見平へ。今年の雪解けは遅く、姿見の池までは雪渓を歩く。雪のないところにキバナシャクナゲが攪乱。まだ高山植物には少し早く百花とまではいかぬ。姿見の池も雪に埋もれている。三島夫妻他1名を除いて全員道内最高峰旭岳(2290m)に2時間かけて登る。さすが山岳部OBとそのワイフだ。我々のパーティ以外誰もいない。天気は今ひとつ、大パノラマとまではいかなかった。ガスの晴れ間に間宮岳方面眼下にスキー登山者の姿と二張りのテントを遠望。昼食後下山。下山後、後発組は天人峽の露天風呂と羽衣の滝見物へ。

夜の宴会は全員疲れていたのか、2時間ももたなく、各自自室へ。我々の他3名の客あるのみ。

6月20日 晴

3台の車に分譲して9:20勇駒荘を後にする。白樺街道を走り、白金温泉経由望岳台へ。ここで十勝岳連棒を仰ぐ。眼下には緑の大牧場。壮大な眺めだ。

十勝岳温泉に行く途中、吹上露天風呂へ有志が入る。ここはガイドマップに記載されてなく、管理人もいない自然の場。

次は高度1280mにあり十勝岳温泉へ。露天風呂に入り、富良野岳を眺める。午前中4回も温泉につかった豪傑もいた。昼食は富良野ワインハウスでワインとステーキ。最高のステーキ180g が3500円と安い。

昼食後は麓郷に行き、ポスターによく出てくる田園風景をバックに記念写真。富良野岳南面と原始ヶ原、素晴らしい景色だ。あとは一路トマムに向かう。トマム到着17:00。ここはいまや全国ヤング憧れの地。

中華料理の後は服部克久の音楽会とサーカスへ。タワーホテルに投宿。

6月21日

トマムの風景を楽しんだ後9:00出発。アイヌの里「二風谷」競争馬の育ての地日高へ。日高ケンタッキーホームで馬に乗ったり、野外でジンギスカン料理を味わい、ウエスタン気分に入る。白鳥の飛来地ウトナイ湖で野鳥の観察後千歳空港へ。ここで早朝出発、北海道早来CCでゴルフをプレーした4人と合流。（誰だ北海道に来てまで女房を放っというゴルフをした奴は。）

大阪組11名はANA17:25発で大阪へ。

短い期間の道内旅行であったが、北海道の大自然に少しは触れたことと思う。天気も今年の6月はカラッとしてなくて、メインの旭岳登山の日にガスとは残念であった。全走行距離750m。又機会を見つけて来て下さい。北海道は広いシデッカイド。

いっしょに漕ぎませんか？

—— ボート祭報告 清原鉄也

昨年の第100回大会は、岡本・奥田・西村の諸兄と組んで、全く初めての顔合わせとしては意外や意外、気持ちのいい「漕ぎ」を楽しむことができました。西村君の放送センターが最高に機能（職場ではそれ以上？）した例ではないかと思います。うまく息づかいを統一できました。

今年は夢よもう一度、と出してもらったが、小生以外は皆様パワーがモノ凄く、呼吸を合わす必要性を思いつく前に、肝心の500mを終わってしまった塩梅です。因みにメンバーは、整長は奥田君の友人でボート部OBの横井氏、3番広瀬君、

2番佐々木君、バウ小生。

レースを終わってから考えたことですが、今後もレースに出してもらえとして、①混成チームで、②ぶっつけ本番に、漕がざるを得ないとしたら、バウに西村君のような出力のデカイ放送局を積んで、全員のパワーを抑え、とにかくオールを合わすことにのみ専念すべきではないか、と。（ここまで書いて気がつきましたが、コックスを軽視するから、こうなる。というより漕ぎ手の頭数を揃えるのが精一杯で、コックスまで目配りしているいとまがないというのが実態です。）

許されることかどうかは判りませんが、レースの何日か前に一度はリハーサルをしておきたいものです。せめてボートの何たるかの概念図だけなりと打ち合わせしておきたい。

その点学長挺のでるレースを拝見しましたが、一挺はオール70才台、学長挺で60才台かと見受けましたが、いずれの艇もたるんだアンヨに半パンツばき。しかし、レースは見事なもので最後まで美しい漕ぎをいていらっしゃいました。

アレがオシャレというモノかも知れません。とっておきの機会のために、一度くらいは調整していらっしゃるのではないかと。そして、とっておきの機会のために若やいで半パンツに更められるという、人生かくあるべきかと思いました。われわれも山に入れば、世人に「なるほど!」と言わせるような洗練された振る舞いを見せているのかも知れません。すると、「まァいいか」という気になってきますが、さて皆さん、如何でしょう。小生は浪華の誇る美しい大川で、年に一度美しい漕ぎを味わうことができたなら、これにまさる青春はない、と言い切れると思います。どなたか同調して下さいませんか？これにまさるゼイタクはちょっと見つからないと思います。4人とか6人のモノが心を合わせ、力を合わすという意味で。 — 反響をお待ちします。



比良観月会のご案内

企画運営幹事

今年も昨年に引き続き、比良山系の広谷にある、自然に包まれた高津山荘に宿泊してお月見をしたいと思います。魅力ある別世界で、岩魚釣り、八淵滝散策、山菜取り、バードウォッチング、主峰武奈ヶ岳アタックなど思い存分自然を満喫

してみませんか。

(行事責任者：中村)

1. 日 時 9月12日(土)～ 13日(日)
2. 集合場所 JR湖西線 比良駅 午前11時
3. 参加対象 山岳会員及び会友とその家族
4. 参加費用 無料 (但し、往復の交通費は個人負担)
(JR大阪駅～比良山上駅往復割引切符 4,140円)
(JR京都駅～比良山上駅往復割引切符 3,020円)
5. 行動計画 *9月12日(土)
JR大阪駅(9:45)～JR京都駅(10:15)～(10:53)
～JR比良駅(11:15)～江若バス～(11:30)リフト乗場
～リフト(13分)～ロープウェイ(7分)～(12:10)
比良ロッジ<昼食>～(13:40)高津山荘
*9月13日(日)
参加者の希望を聞いた上で行動決定。JR大阪駅18:00予定
6. 在阪連絡所 中村光伸 ☎ 075-922-8232
7. 服 装 トレーニングウェア(上下)または登山用服装
運動靴または登山靴 純毛または厚手の靴下
8. 持参物 替え下着(上下) 替え靴下 セーター 洗面用具(歯ブラシ・歯磨き粉・タオル2枚) 雨具 ヤッケ ゴミ袋(大3枚)
軍手 常備薬 水筒(1ℓ) 懐中電灯 昼食(タッパウェア)
*米2合、寄鍋料理の材料一品、
*アルコール類の差し入れ大歓迎
9. 食事メニュー

	<朝食>	<昼食>	<夕食>
12日	――	各自持参	寄鍋・鳥釜飯・岩魚骨酒
13日	しめじ汁 サラダ	焼きソバ	――
10. 申し込み及び雨天時連絡先 幹事 岡本(☎06-385-6307)
西村(☎0729-88-0863)
中村(☎075-922-8232)
*食料の準備がありますので、参加される方は8月31日(月)までに上記までお電話下さい。
*余程の悪天候でない限り、行事は決行します。
*直接高津山荘に行かれる方は必ず事前にご連絡下さい。

山 行 記 録

残雪期山行

山 域： 北鎌尾根

期 間： 4月30日～5月4日

メンバー： 高尾 裕（現役）・三木孝史（OB）

4月30日

七倉で計画書を提出し出発する。ダムをつづら折りの手前で早くも雨が降ってきた。ひたすら歩いて湯俣へ。いつからか雪に、そしてミゾレになって冷たさが身に滲みる。ここから水俣川の左岸に行く。途中では何回かのやらしいへつりと高巻きを繰り返す。要所にはフィックスがあるものの、足場が濡れておりスリップするとまず助からない。最後の高巻きでは念のためにハーケンを打ってアップザイレンする。壊れた釣り橋を渡って千天出合に着く。最初のイメージと違い、樹木がうっそうと生い茂り陰鬱な所である。この日は全身びしょ濡れでとにかく不快な夜を過ごした。

（七倉6：00～無人避難小屋9：20～晴嵐荘11：30～千天出合17：30）

5月1日

朝起きてみても依然雨が降り続いていた。すぐ出発する気にもなれず、様子を見ることにする。昼頃から太陽が顔を出し始めたので、濡れた物を乾かし始めた。今日はとりあえず尾根上に上がることにする。まだこの時期は雪が残っていて、対岸には難無く渡れる。支尾根の取付には遭難碑があるが、案外これは見落とされがちのようだ。赤布その他の印は無い。P2まで終始急登が続く。古いフィックスを頼りに忠実に尾根をたどって行くと、最後は傾斜40°高さ40m程のちょっとした岩場にでる。氷が張っていたが難なくこなしてしばらくすると、ひょっこり平らな場所にでる。P2のてっぺんは目と鼻の先だが、ここがP2の天場のようだ。実際にはP2の肩と言ったところか。

（千天出合13：30～P2取付14：00～P2肩16：00）

5月2日

無風快晴の登山日和である。しかしラジオは午後から天気が崩れると告げていた。小ピークの登降を繰り返してP3、P4を過ぎる。4・5のコルから天上沢

側を大トラバース、雪壁を斜上すると5・6のコルにでる。次は千丈沢側をトラバースする。ステップは比較的安定しているが、スッパリ切れ落ちており緊張する。真っすぐ上がってP6に抜ける。P7の急な登りを越えると、北鎌のコルまでブッシュを頼りにクライムダウン。ここからP8までは、急な雪稜の登りが続く。息を切らして登りきるが、すでに視界はほとんど無い。アイゼンを軋ませ通称『天狗の腰掛け』を過ぎると、独標が黒々とした岩肌を見せている。

(P2 5:00～5・6のコル 9:00～北鎌のコル11:00～P8 13:00～
独標基部15:00)

5月3日

独標は左手の雪のついている部分から登る。頭を押さえられ右に巻く。ナイフエッジ気味になった所でザイルを出す。足下に千丈沢が見下ろせて高度感抜群である。広くて美しい斜面にザイルを延ばし、頭に飛び出した。このとき初めて槍ヶ岳が天を突き刺す威容で目に飛び込んできた。裏銀座の山並み、後立山から日本海、笠、双六、三俣蓮華、そして孤高の厳峰剱岳。独標は知られざる北アルプス展望台である。北鎌の醍醐味はここから始まる。天井沢側にへつり気味のきわどいトラバースを演じた後は、雪稜を快適に飛ばす。ザイルで確保はしていない。徐々に大槍が大きくなって近づいてくる様は、快感である。小ピークを巻く場合はすべて天井沢側を巻く。P15を過ぎるころは、うれしくなるような登降だ。このまま進むのはもったいないぐらい。キックステップとアイゼンの爪を生かしてぐんぐん行くと、広々とした雪面に出る。ここが北鎌平で頂上直下である。烈風が吹いていた。一気に頂上を落としてと思いきや、人込みの列。見ると指導者らしき人がユマールか何かの使い方を説明している。岩陰に潜んで風を避けていても、遅々として動かない。なぜこんな場所で講習会をやるのだろう？1時間してアホらしくなったので北鎌平に戻り、天幕を張る。

(独標基部6:30～独標の頭7:00～14・15のコル11:30～北鎌平13:00、
天幕15:00)

5月4日

昨日からの風がまだきつい。視界なし。昨日無理して登っておけばよかった。穂先へは、岩の間をぬって氷化した急な雪壁を4ピッチで、祠のある槍ヶ岳山頂に立つ。ガッチリ握手を交わす。立つのもやっとと言った感じで、感慨もそこそこに降りる。念のためにスタックカットや懸垂下降を交えて行った。皮肉なもので槍ヶ岳山荘で休息を取っている頃、風がおさまり青空が見え出した。人里恋しく

槍沢を駆け降りる。

(北鎌平 8 : 00～槍ヶ岳山頂12 : 00～槍ヶ岳山荘13 : 00)

今回は現役の西野の参加が曖昧だったので、単独で行こうかと真剣に考えていた矢先、三木氏から電話があった。結局二人だけになったが、それにしても現役同士でこの時期に山へ行けないとは情けない限りだ。疲れた足を引きずって、心はなぜか弾まない。屏風岩が病的に見えた。夕映えに輝く北尾根を見つめながら考えた。何もかも忘れられるぐらい、岩を、山を、登りたい。なりふりかまわず登りたいと。夏は、もう一度穂高へ来てみよう。

商大山岳部の思い出（後編）

(高商昭和17年卒) 池田春次

いろいろな出来事があったが、私の失敗のハイライトは、富士山頂からの滑落である。昭和16年12月、冬休みを利用して山岳部で集中登山を行うことになり、私は吉田口班で参加した。メンバーは、リーダー川本さん、私、鈴木君、藤田君(部員外)の4名だった。冬山の完全装備、各人10貫目余り(約40kg)を背負って富士吉田駅から雪の道をトボトボと歩き出す。富士山麓の非常に長かったこと、荷物の全く重かったこと、今でも決して忘れられない。

1合目から5合目までは、スキーをはき荷物を2回に分けて荷上げ、5合目で幕営し、ここからアイゼンをつけて登りはじめる。…詳しくは省略…強風の中を悪戦苦闘、やっと頂上に辿り着く。

しかし頂上は物凄い西風で集結地へは進めない。親指大の小石が弾丸のように飛来し、吹き飛ばされそうだ。(下山後に聞いたが最大風速30mとの由)空は快晴だが、歩くこともテントを張ることも出来ない。蒼氷を割り、その下の岩石を取り払い、屋根に穴を空けて小屋にもぐり込む。籠城2日間(?)それでも強風は止まない。「天気晴朗なれども風強し」。焚き火の煙で目をやられ、寒い上に食糧も乏しく、致し方なく来たコースを引き返す事にする。

ガラスのように堅い蒼氷の急斜面を下り始めるが、急に下方から吹き上げてき

た突風に足をすくわれ、アッという間に滑落した。頑丈なピッケルが折れて使えない。急傾斜の氷のうえ、加速度がついたら凄いスピードだ。時々岩にバンドし体が宙に浮くのがわかる。だんだん頂上が遠くなってゆく。全くなす術はない。

やがて、体が静止しているのに気づいた。雪の吹きだまりに落ちこんで止まったのだ。八合目の小屋の近くだった。約500mは滑落したと思う。軽い打撲だけで命に別状なかったことは不幸中の幸だった。その夜は八合目の小屋で泊まり、翌日は昭和17年1月1日、仲間と一緒に無事に下山した。

年が改まって昭和17年、身辺整理に忙しく、私は殆ど部活動は行わなかった。半年繰上げ卒業、臨時召集、そして10月に陸軍に入隊し、短い変化の多い商大の学生時代は終了した。

— なお、これ以降は余談になるが、その後の体験などを述べておきたい。

陸軍では私は航空隊で戦闘機のパイロットをしていた。ある日、高度5,000mでエンジンが止まり急降下で滑空し、大音響と共に海岸の松林の中に突入、機体はバラバラになったが、体には傷ひとつ負わなかった。昭和20年5月、東京上空で敵機と交戦中にエンジンに被弾し、機体は火災に包まれたが、落下傘で脱出し幸いにも一命は助かった。火傷の重症で、今でも生々しい傷あとが手と足に残っている。しかし、この事故がかえって幸運となり、8月の終戦は陸軍病院で迎え、以後の余命を全うしつつある。人間の運命は全く不思議なもので、死ぬべき人は簡単に死んでいった。私は数回死と対決したが、悪運強く生き延びている。

— 終戦直後、私は蝶理に就職し、22年間同社で働いた。その間、山岳部に引き続いて再度大橋さんに大変お世話になり感謝している。昭和20年代、30年代の高度成長時代は、仕事と生活に追われ山とは無縁であった。しかし、昭和40年頃生活に少しゆとりが出来てくると、昔の山の良さが忘れられず、また山歩きを始めるようになった。

以来27年間、近畿の山や北アルプスなどを歩きまわっている。岩登りや3,000m級の冬山はやらない。昭和59年秋、山仲間7名でネパールトレッキングに出かけた。学生時代からの夢が42年ぶりに実現したわけだ。エベレスト山麓のベースキャンプ地まで行ったが、雪煙をなびかせた素晴らしいエベレストの威容に接した時の感激は一生忘れられない。

— 学生の頃から六甲山麓に住んでいる関係もあり、私は特に六甲山が大好きだ。ハイク道から少し外れた谷や尾根には、未だ静かな素晴らしい自然が残っている。話は、昨年末に亡くなられた泉さんのことになるが、昭和60年、私が「六甲山の溪谷」というガイドブックを出版した時、一冊を泉さんに贈呈した。すぐ電話があり、「立派なもんや。市大山岳会で山の本を書いたのは池田君が初めてや。何

冊でも売ってやるから事務所に持ってきてくれ。」と言われた。心血を注いで書いた本を賞賛され、私は涙が出るほど嬉しかった。そして、書いて良かったと思った。情のある立派な人を亡くし、心から痛恨の念にたえない。

私は当年70才、まだ元気で毎週1～2回は山歩きをしている。大阪にある「いこいの山岳会」（会員数430名）の副会長を務め、月に1～2回はリーダーも担当して、中高年登山者の教育と育成に当たっている。泉さんが昨年まで会長をしておられた「近畿山岳愛好会」（550名）と共に、府岳連傘下では会員数で屈指の山の会だ。しかし、会員が多いと毎月沢山の例会を企画せねばならず、また会員の高齢化の問題等いろいろと頭の痛いことも多い。平日の仕事よりも休日の山行などが忙しいようだ。山歩きは、若返りと気晴らしと健康に良いし、また他人のためにもなるので、元氣な限り続けてゆきたいと思っている。

（平成4年2月17日記）

* * * * *

☆☆☆編集後記

島川法律事務所の森田さん、上兼さんお疲れさまでした。ニュースの発行に関しては特に御世話になりました。前回発行からは海外の会員にも送付してくださっています。また一緒に山でも行きましょう。島川先生、裁判官に転身されるとか。これからのご活躍をお祈りいたします。

（編集 矢倉）